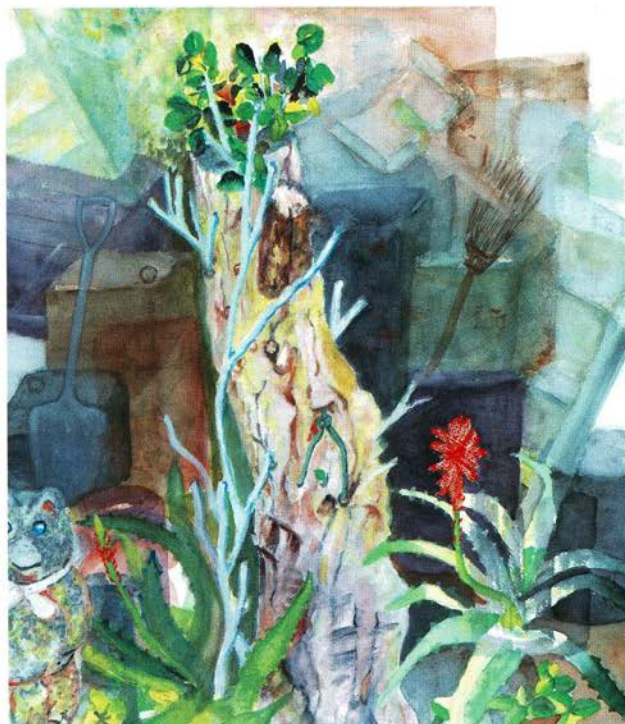


村野次郎創刊

香蘭



2021年(令和3年)12月号

第 98 卷

第 12 号

通卷 1092 号

二〇二一年(令和三年)十二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十八卷第十二号



香 蘭

2021年(令和3年)12月号
第98巻 第12号 通巻1092号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(76)	牧田明子	表二
近詠十五首 ひとつ覚えに	渡辺君子	2
作 品		
一		4
二		23
三		30

推薦香蘭集

香 蘭 集

作品一特選(十月号)	市川・室橋・川原・柏原(義)・中村(か)・宮口	36
------------	-------------------------	----

作品二、三特選(十月号)	渡辺(君)・牧野・近藤(光)・村上	16
--------------	-------------------	----

村野次郎への旅(140)	柳沼・渡邊(典)・藤田・中村(陽)・関口(洋)・川久保	20
--------------	-----------------------------	----

一頁公論(7) 湾岸歌会は「七転び八起き」	桜井京子	22
-----------------------	------	----

エッセイ・自由研究 万葉集「宮廷歌人の恋と歌」その四(最終回)	近藤純	42
---------------------------------	-----	----

魚 点(十月号) 前向きな発想、爽やかな気分の歌	西野美智代	46
--------------------------	-------	----

七首抄(十月号)	菅沼・大島(保)・富田・近藤(美)	48
----------	-------------------	----

坪裕「錆色の空」評(十月号近詠十五首)	岡野甫江	49
---------------------	------	----

作品一	石井雅子	50
作品二	高田みちゑ	52
作品三	竹本幸子	54
香蘭集	藤田祐恵	56

耳言あれこれ(1)	田中あさひ	58
緑地帯	柏原陽子・伊藤久美子・河野慎二	59

歌会及び会合・会員消息・他		62
編集後記・新宿日記		66
表紙絵	中村陽子「おしゃべりな木」	表三
	目次・緑地帯カット	和雄

牧田明子

村野次郎作品 私の愛誦歌(76)

地の上のもろもろの音降りしづめ

雪のゆふべのあかりただよふ

『樗風集』

昭和十三(1938)年に刊行された『樗風集』より昭和六年の作品を引いた。

この歌は小題「かなたの空」の三首目に置かれていて、韻律の整った調べに感動の余韻はいつまでも残る。その師の北原白秋が「歌を人生にした」のに対して、村野先生の作品は「人生を歌にした」と言われ(千々和代表による解説)、生活の中よりの現実を歌った優れた作品が多く残されている。

抄出歌を見ると、雪は地上のものみな音を鎮めて降り続くと幽玄の世界を言う。そして夜ゆえに、地上に積もった雪の辺りはほのかな灯りが漂うと詩人の視点からの観察は味わい深く、その心境も窺える。しかも、その雪の灯りは「地の上のもろもろの音」と思えば初句へかえってゆく。

平明な言葉で詩歌の世界を高めて表現された作品で、私は長年愛誦歌としてきた。

(短歌新聞社文庫『樗風集』71頁。『村野次郎三百首』には収録されていない)

四 選 者 の 作 品

壊れ物 平塚 千々和 久幸

いずこにか傘を忘れて狐雨止みたる橋を渡りて行けり
カウスターの向こうは狐によく似たる女将が独りわれに顔なく
しどけなき女には艶 しどけなき男はほとんど壊れ物である
敬老の日は嫌老の日ならんか要なき者が世を憚らず

人事権行使の快感覚えたる宰相が人事で身を減ぼせり
廃屋にうなだれて咲く黄のカンナ実りなき日を記憶に留む

カレンダー剥がし忘れしこと忘れリビングに九月、十月が近く
ワクチンの接種終えたとマスクして妻が車椅子に押されてきたる
仲秋の月 我孫子 丸山 三枝子

カレンダーの予定あれこれずれこみてゆくなり葉月より長月へ
当所にて余生を全うすべしとぞ転居通知のきて九月逝く
この五年効いているのかいないのか五分で終わる腰痛体操
みどり葉を吹き抜けてゆく秋風や糸瓜忌あさのツクツクボウシ
この秋の墓参も二人子に托し定まれるらしわが白秋期
マスク忘れ頂垂れており 非国民とはさしずめこんな心地ならんか

忘れ忘れ忘れ忘れて生きてゆく 我を忘れて咲く曼珠沙華
昨夜めでし仲秋の月 白昼の大泉水に円く揺らげる

ダリアの図柄 東京 桜井京子

もう一度あの場所でもまた逢ひませうひと夏咲いて終はつたカンナ
帰りにはきつと買はむと見て過ぎて忘れてしまふ彼の鬼灯よ
いくつかは莢となりつつなほ咲ける合歡の花なり咲いては散つて
高層階わが家に暮してよかつたと思ひるるらし夕立あがる
クオカード呉れたる人よ真つ白なダリアの図柄を選びて送り来
蟬の声ドアが開くたび入り来るクリニクにてワクチンを待つ
毎日が暇でごろごろしてゐます曼珠沙華ああ真つ赤に咲いて
スカイツリー朝な夕なに眺めては百年のちもわたしはひとり

寒 蟬 横浜 渡辺 礼比子

はつはつに癒えて仰げる秋空にああ寒蟬はまだ鳴いている
身ぎれいに老翁ひとり暮らす家かぜ吹くたびに小萩こぼれて
CDのサティいつしか止みいたり本読む窓に鳴くツツレサセ
その兄の終焉地とて父の詠む「ガ島」を「餓島」とわれは知りたり
今日われの発したるただ一言の「ふくろあります」豆腐を買って
ピンポイント天気予報をかたくなに信じたる夫濡れて帰り来
夢破る 夢の輸送機ドローンがアフガニスタン空爆したる
手伝いすな勉強せよと母いえり誰ぞの講演聴きたる日より

作品一特選



(十月号作品から)

千々和 久幸 選

さやうなら歩道橋 東京 市川 義和

江戸川区に在住早も四十二年日々親しみし歩道橋のあり

朝な朝な通勤経路の歩道橋を渡りき信号待つ間を惜しみ

ライトアップされたるツリーの立ち姿に見とれし冬の夜もありたり

スカイツリーの確と望める歩道橋(撤去)の貼り紙突如現はる
老朽化と利用者減が理由らしい時代流れて厄介物か

歩道橋の撤去惜しむか野次馬か二十人ほどが見詰めてをりぬ
翌日の昼間現場に立ちたれば遮るものなく空の広がる

・歩道橋は作者の心の風景。「歩道橋抒情」というべき。

明日へ未来へ 群馬 馬室 橋 玲子

雨風に負けじと凌霄花の咲きはこる濡れてますます色を濃くして
いざ行かん踏み出す足に力込め明日へ未来へ一歩一歩と

難病の足を駆使して家事をするカキクケコケるなサシスセそると
朝日浴び草を引きゆくナス、オクラ、キューリの花が競って咲くに

注目をされいるわれかも似たような患者ばかりの病院内に
外出も儘ならず自粛していますテレビ体操に息はずませて
・青空と太陽と、傍らに夫と短歌があれば明日に希望が。

未練たらたら 川越 川原 優子

休日にひよいと思いい立ちます服を処分せんとて出しては仕舞う
捨てたとて困りはしない服ばかり未練たらたら吊しておりぬ
今日中に手紙を書かんと決めている決めざれば唯だらだらと過ぐ
退くことのできず決まりし無観客 毒を食らいし東京五輪
目標を高く掲げて自らを高めてゆくなど我には無縁

鉄棒を掴み損ねて夢断たるかく幕引きはあつげなく来る
・五、六首目はあつけらかんと己を曝して近時の快作。

終局の人生 尾道 柏原 義清

電気器具のリモコン机上に五個ありて運動不足を助長するなり
蟬の声聞こえて消えて又聞こゆ嵌めて外して嵌めた補聴器
熊、油、法師、にいにい、ミンミンはわが住む島に鳴ける蟬たち
かみ合わせ我と姪との会話なり終局の人生これからの人生
新聞を読みテレビ見てひとり居は人が来たれば饒舌となる
ワクチンの注射の痛み問う人よレモンの棘の痛さよりまし
・生来のユーモリスト、これからの人生も突つ張つて行こう。

五輪 福岡 中村 かよ子

もうすでに何かが終っていたことを長々とみる開会式に
笑むことも泣くこともなく虚空見る最終聖火ランナーなおみ

失つたものの数など数えまい花火が終る東京五輪

あらがうかあらがわぬかを問うて来る世の終りかの如き満月
真つ白な新郎新婦あなたには染まらないわと火花を散らす
狂躁と焦燥の日の蟬しぐれああ単純に大地は息する

・人生に満月は無いが、あなたに染まることも人生のうち。

問答無用

東京 宮口弘美

セピア色の美男と美女がアルバムに赤子のわれを抱きておりぬ
警官の三人連なり一様にガニ股で行く新宿地下街

断りの返信メールは六時間のちなれば君の迷いの長さよ

夫や子の帰りを待ちし夜ありきペランダに出て星を眺めて
そそくさと息子は帰るこんなにも待ちわびし母の心を置いて
庭以外に生えたる草花すべからく雑草と見なす問答無用

・人生は胡蝶の夢、さりながら問答無用と斬り捨てられない情もある。

雨後の林道

大月 渡辺君子

アンデスの乙女とう紅き薯あれど慣れたる味なり男爵薯は
霧深き朝となりたり傘さして何処まで行こうか掻き分けながら
飢饉ありて昔子どもを埋めしとぞ密やかに南無阿弥陀仏の石碑
合歓の花散り敷く雨後の林道を歩めば木洩れ日ちちかちか遊ぶ
勤め帰りに看護師吾子の染めくるる髪匂うなりヘナの香りに
陽が落ちて涼風吹けば一葉の葉書を持ちてポストへ向かう
久々に夫が網戸を洗いくれて夕風涼しく部屋に入りくる

・土の匂いのする、質素で堅実な暮らしが窺える。

樹木ナンバー

町田 牧野道子

幹に巻く樹木ナンバー消えかかり梅は今年の花を終へたり
突然に眠りさまされ男爵がはつ夏朝のひかり眩しむ
外出の減りたる日々に豊作の男爵夕べの卓を制覇す
鬼の首取つた気分归母校にて二度目のワクチン接種を終へる

キャンパスの銀杏を巡りてワクチンの接種に並ぶ若きらの列
日常語となりし「人流」増えゆける朝の新宿さあ編集部へ

・内面の闇は見せない、晴朗で滞りのない詠み口が魅力。

コロナ予防注射

足利 近藤光子

国策のコロナ予防のワクチン接種逆らわず来ていたく疲れる
老人の集まる今日の注射日に並べといわれくたびれ果てつ
生でよし炒めてもよし食べ方をセロリくれたる友に教わる

AIをドローンに積んで戦うとニュースの切れ端さむざむしけれ
肝臓が疲れ気味だと数値見せ医師は休肝せよと言うなり

・一〜四首、きっぱりした物言いが個性を際立たせる。

日本チャチャチャ

さいたま 村上美智代

「ひまわり」の映画音楽によみがへる悲話のバックの一面の黄
去年の種かこぼれ育ちしベチュニアが廃墟の庭より夏空仰ぐ
夕ぐれに点せば窓のガラス戸に母とよく似し老婆の浮かぶ
コロナ禍に双子誕生の知らせありお出出来したぞ でかパンダであるが
路上呑み多きは日本チャチャチャのオリピックがもたらせしもの

・三〜五首、作者が陽気に愉しんでいる歌は生影がある。

作品二、三特選



(十月号作品から)

桜井京子 選

〈作品二〉

決意あること

鎌倉 小原 裕 光

恋鳴きは山羊に似ていてパンダ舎の飼育係の春は忙し
十年の歳月を経て映さるる津波に沈む三陸の街

「雨あがりの光る街路へ出でし人決意あること上向きてゆく」

「九十歳に二十本の歯を残せ」歯医者と言うが自信はあらず

「ばつたりと鳥は見えなくなり」にけり鳥には鳥の事情あるらし

・二首目、パンダの恋情、出産の顛末を「春は忙し」と纏めて楽しい歌。

コロナの日々

鎌倉 高田 みちゑ

何となく心の丸くなりてゆくコロナの日々のつばめの来訪

駐車場の雛の巣立ちし空の家見上げて寂し夏雲の湧く

「いざ鎌倉」久しぶりなる町中の車道をゆるりと猫が横切る

救急車は帰り道らし行儀よく赤信号の車列に並ぶ

早ばやとコロナワクチン二回済みこの世の気がかり少し遠退く

・コロナ禍が日常となる中、身辺の些事をさりげなく切り取っている。

遠野に夏

柏 江口 絹代

水ようかんを二つ食べても良い歌は出てこないぞ そうではあるが
つづら折りに流れる青き川あれど遠野の母の行方わからぬ
山葡萄をあまた手に持ち笑みし姑 遠野に夏が来ているはずだ
日日草は哀れ悲しく枯れゆきぬワクチン二回目も雨降りの中
・一首目、良い歌を作ろうとすると辛くなる。心を遊ばせることだ。

ゲームとゲームライター

相模原 沙 阿 羅

大丈夫雨が降っても来月が本来七夕きつと逢えるよ
気が付くとスマホゲームをやっている逃げてる事は重々承知

ご時世で在宅ワークは周知され違和感も無く働く息子

いつか子の携わるゲームが売れたなら東京五輪を思うだろうか

・四首目、コロナ下の東京五輪だったと思いい出す日がきつと来る。

2020・東京

横 浜 庄 司 健 造

群青の大空高く立つ雲の今日は五輪の開会日なり

瀬戸大也の敗戦の弁聞きながら猛暑の余熱のこりておりぬ

東京の空に五輪の輪を描くブルーインパルス ひまわりの花

はた目には悩みはないと思われてアガパンサスは大きくゆれる

・一首目から三首目、東京五輪がひと時の退屈を紛らしてくれた。

ピ ア ス

千 葉 竹 本 幸 子

凜とした眼差し向ける看護師の完全装備にピアスが光る

梅雨明けの近きか蟬が鳴き始め人間だけが憂鬱な夏

連日の豪雨に打たるるアガパンサス疲れましたと項垂れている

「三十四年間ありがとう」貼紙残しカフェ白樺は閉店したり

・一首目のピアスは看護師のささやかな自己主張、そこを捉えた。

折り返し

さいたま 松 沢 みどり

寝る前に気がつく家庭訪問で先生に出すお菓子が無いと

痩せたいと思うだけでは痩せないと分かっているが唐揚げ旨し

人と話すことに疲れる週末はナンプレの本を買って帰るぬ

五十三と五十四の違いなどあるわけもなくまた歳を取る

人生の折り返し地点は過ぎたのか過ぎたのだろう食器を洗う

・慌ただしい日常を活写し、過ぎてゆく歳月を愛惜する。

儲かりまつか

足利 柳 沼 きよ子

ワクチンの予約できずに諦めて何と言うべきこの清しさは

I O C 乞食根性丸出しで儲かりまつかオリンピックは

竹落葉際限も無く降り積もり孟宗淡竹と散り継ぎて梅雨

菅さんが流行らせた「安全安心」を猫も杓子も使っておりぬ

・闊達な心の動き、したたかな批判精神が見どころ。

〈作品三〉

屹

立 鎌 倉 渡 邊 典 子

薄明の夢にわが見し一点の灯火のごとくカンナは咲けり

時満ちてひとつまたひとつ花終ふるカンナは空に屹立のまま

目つむれば梅花のまほろしきれぎれに青実の落つるを聞にききつつ

かにかくに五十七年を積み来たり和魂の国五輪ふたたび

・感覚を研ぎ澄まし対象を捉えている。四首目は自祝の歌か。

曇りぞら

横浜 藤田 祐恵

雑用の押し付け合いで曇りぞら小人われら輪になって踊る

幽霊も子供も犬もいやしない柵で囲われた児童公園

降り続く雨を覗けば御向いの出窓の猫は香箱座り

あつてなくワクチン予約とり終えて録画のドラマの続き見ている

・物憂い日常が切り取られて魅力的。三首目はくつろぐ猫の姿。

ジャコウアゲハ

東京 中村 陽子

新中川の土手の一角に保護されたジャコウアゲハの乱舞を思う

コロナ下にオープンしたり「喋らない美容室です」梅雨明け間近

娘の家に今日は来ておりひとときを娘の日常のさざ波のなか

石楠花の弱った枝に花が咲く今日の私は饒舌らしい

・二首目、市井にもこんなウィットが転がっていて愉しい。

水 槽

常陸太田 関 口 洋子

隣人と垣根越しなる立ち話仲間に入れてと蟬が鳴きたす

母がいて東京五輪を街頭の白黒テレビに見ていたあの日

思いつく出の中の母さん良く笑い大きな声で私を呼んだ

・二首目は前回の東京五輪。あの頃の日本は登り坂で活気があった。

チェリーブロッサム 川 口 川久保 百子

いつか来るわたし一人になる暮らし今日さす紅はチェリーブロッサム

逆光に黒く写れるヤマボウシ満開の白を写したはずが

ゆつたりと風に揺れているヤマボウシ昨日の白より今日のうす紅

・眼前の景色の向こう側にある物を見極めようとする姿勢が良い。

ひとつ覚えに

渡辺 君子

はからずも二月二十三日は富士山の日とて花火が夜ぞら彩る

冬花火おえたる空に望月の上がりて湖を隈なく照らす

冬の草抜いて汚れた手の指を洗えば温し庭の井戸水

訪ね来て福寿草が咲いてると明るく告げて娘は帰りゆく

廃校の小学校の校庭にひさびさ上がる野球する声

人恋しくなれば出で来る向かい家のおばさん今日も長話なり

鹿や熊、猪もでる村なれど今朝は鳥啼きリスが訪い来る

猛烈な暑さに発芽せぬ野菜たまに芽吹けば鳩がついばむ

ノートパソコン忘れたる子がハイウェイをとばして来たと山家に戻る

風呂上がりさっぱり着替えた夫より洗濯物の礼を言われる

ラベンダー咲くころ待つと便りあり心ははやも北野をかける

想随言とひ

てに家山

コロナ禍の外出自粛に詐欺注意有線放送ひとつ覚えに

「コロナ禍の大学生に食糧を」カンパのポスター村に貼りゆく

親子六人車で帰るを見送りてお茶でも飲もうと夫の呟く

日記帳、電子辞書、「香蘭」ひろげおく八十センチの私の机

私の村は、嫁いできた頃を思うと、ずいぶん様変わりした。昔は野良で働く年寄り達の元気な声が聞こえたものだが、そんな年寄りの多くは鬼籍に入ってしまった。一方、小さな子供達を見かけることが少なくなつた。

わが家では、初めは夫の弟妹が同居していたが、結婚して出て行つてからは舅姑と夫と私、生まれてきた四人の子供達の八人暮らしが長く続いた。しかし、その暮らしも今は過

ぎて、夫と二人取り残されたように山峡の家に暮らしている。夫とともに四囲の山々の季節の移ろいを眺めつつ、年老いていくのだから。夫はたまにやってくる息子や娘のために野菜作りを楽しんでいるが、私は骨折してからは、もっぱら声援を送るのみである。

私の楽しみと言えば「香蘭」だ。「香蘭」を開くと懐かしい顔が浮かび、歌の中に日常が窺えて、私も頑張らねばと思うのである。

村野次郎への旅（140）

大正期の「香蘭」（一）

わたしがいま手にしているのは、「香蘭」昭和一年（大正十五）第四巻の合本である。これまで六回に亘って大正十二年（1923）三月発刊の「香蘭」創刊号を読んできたが、編集部にはその後の合本はない。

つまり編集部の書庫には第一巻第一号の後、第三巻第十二号までの歌誌は残されていないのである。国会図書館には資料として保存されている筈だが、本稿ではその期間はスキップして、現に手元にある資料を読み継いでいきたい。

もともとこのシリーズは専らわたしの興味中心の気紛れな旅であり、短歌史的な側面には殆ど無頓着で書き継いできた。この後も毎月一度締切日前に、合本の該当頁を繰り一読者として気取った旅を続けたい。

前置きが長くなったが、第四巻第一号を開いてまず気付くのは、北原白秋の圧倒的な存

千々和 久幸

在感である。表紙繪、裏繪及題字も白秋の手になるものなら、この号では表紙に続く頁にも白秋の北海道アイヌ部落訪問のグラビアが掲載されている。

そして雑誌を開けば、白秋の一家言が2頁に亘って掲載され、作品欄では白秋の「アイヌ風景」十五首が巻頭を飾っている。最初に奥付を見ておこう。

香蘭第四巻第一號（毎月一回、一日發行）
大正十五年一月一日發行 東京市外淀橋町角
筈九二 編輯兼發行者 田中次郎 發行所
香蘭詩社 東京市外淀橋町角筈九二 田中方
定價一部金四拾錢 郵稅貳錢 印刷人 館山
了吉 印刷所 東京市外澁谷四四七

さて新年巻頭の北原白秋の「一家言」から読んでいこう。

修業

詩歌の道に於ても、苦業十年にして辛らうじて立ち、二十年に及んで漸くに畏れ、三十年に到つて多少とも境涯の何たるかを知るであらう。その後は窮まるところを知らず。畢竟これ一生の道であらう。

辭書

私は言葉が豊満だなどとよく過褒されるが、決してさうだとは自ら思つてゐない。たゞわかりきつたことでも一旦は必ず辭書を引いて見るだけである。

他流

他流を知ることは自己を知ることである。

禮節

禮節の紊れたる今日のごとく甚しきはあるまい。長幼おのづから序あり、先進と後學の間にも亦おのづからにして別あるべきは私の言を俟つまでもない。而もこの頃の無秩序と不謹慎とは如何。

道には禮があり、人には節度無くして、何の詩何の歌があらうぞ。

何が故に、昨の先生を今日の君と爲なければ矜れないのか。

禮節を守るとは、己れを持することに外な

らぬものを。

以下略

一家言とは「その人独特の主張・論説。また、見識ある意見」(広辞苑)とある。白秋は歌を作る前に「人間を拵(こしら)える」ことが作歌修業の要諦であり、作歌即人間道とする哲学の信奉者だから、この一家言はその道程を示したものであり、格別珍しいことを言っている訳ではない。

ここでは同人、交友の月々の作品を横目にしながら、年来の信念でさらなる作歌への精進を促したものと読める。

さて短歌欄には白秋の「アイヌ村風景」十四首の他に杉浦翠子「枯草」八首、以下今井嘉雄、橋本敏夫、柿谷伸、冬野木枯、本間樂寛、荒木暢夫、石野正太郎など十三名の作品が掲載されており、最後が村野次郎「冬の日な」十二首である。

冬の日な

村野 次郎

①冬の日なたに胡桃(くるみ)をつぶし食(た)して居りひとのわれをつぶやきにつつ

②朝の日の陽ざしとなりて山茶花のうすくれなるはつばらかに見ゆ

③うつくしき人のを指の爪のごと陽にすきて見ゆる山茶花の花

微 恙

④かりそめの病にふせば爪の間のはづかなる垢も氣になりにつつ

⑤冬の日暮るるにはやしはづかなる眠りの間にもかげりそめたり

⑥めさむれば肌(はだ)しとどに汗ばめり解熱(げねつ)の薬(くすり)さきやしたらし

⑦時折に葉蘭(はな)さわがす風のおと霜夜(しもよ)をさむく厠(せ)にし居り

⑧所在(そこ)なくめさめて居れば霜の夜をひくく啼きゆく五位(ごい)鷲(じゆ)のこゑ

⑨みんなみに一羽(ひと)わたれりつぎて来る五位(ごい)を待ちつつ床(とこ)にさめ居り

かなしめる友に
⑩ちまた吹く風(かぜ)すでに寒(さむ)しうらぶれて友を偲(おも)へばありがてな

⑪かなしめる友のころはひとすじなりかく思ひつつうれひ居るわれは

⑫ひとりごころをみつめて居るはつらくあらんわれにし逢(あ)はばこころ晴(は)るるを

身辺の瑣末(さまつ)事を丁寧(ていねい)に掬(く)い上げて、いかに

も先生らしい穏やかな作品である。ざらつく太陽や燃え盛るものより、盛りを過ぎて衰えに向かうものに寄り添う、「冬の日な」の趣である。作品から受ける印象は、先生は「日溜りの歌人」とも言うべきだろう。

さはさりながら先生、時に三十二歳。壮年期にありがちな野心や客気はこの一連からは感じ取れない。

③では「うつくしき人の爪」を詠つても、一首のどこにも女人は登場せず、その爪は山茶花の形容に収斂(しゆん)していく。

「微恙」は軽い病のことだが、先生は落ち着き払ったものである。大方は苛烈(ごれつ)な日々を生きたる壮年期にあつても、先生はベッドに仕事上の資料や退屈(たいくつ)凌(しの)ぎの本を持ち込んだりはない。冬の日を眺め、風の音を聞き鳥の声を心に留めている。

「かなしめる友に」では不遇(ふご)な友を思う気持ちが動いているが、その具体的に踏み込むことはない。「うらぶれた」友、「かなしめる友」に一人の友人として同情(どうじやう)を寄せる、といった地点に踏み止まっている。

⑫の歌、先生にとって友を思うとは、その胸のうちを聞いてやることから始まる。